

第1章 経済学入門：関数と微分

本章では、経済学の学び方を知るために、経済学とはどういう学問か解説する。あくまで、その内容は今後の受験勉強の指針とするためのものであり、経済学全般を要約するというわけではない。会計士試験における経済学の特徴を知り、その勉強方法を示唆することが本章で最優先される課題である。

さらに本章では、関数の概念と微分のしかたを学ぶ。これらは経済学を学ぶ上で必要不可欠の分析用具である。

I 経済学とは何か

I-1 経済学の定義

経済学とは、経済学者がやっていることであるという有名な定義があるように、漠然として一言で定義することはむずかしい。しかし、ここでは受験生が知っておくべき定義として、希少な財やサービスを競合する目的のために選択・配分する方法やメカニズムを研究する科学であるというものをあげておこう。

経済学：(定義) 希少な財やサービスを競合する目的のために選択・配分する方法やメカニズムを研究する科学。

I-2 経済学における実証と規範

その経済学はいくつかの分野に分けることができる。まず、その分析の目的に応じて、実証経済学と規範経済学とに分けられる。実証経済学というのは、社会で生じる経済現象における因果関係をつきとめるのが目的である。たとえば、「所得税率を上げると消費が減少する」という命題は因果関係を示している。そして、それがよいことであるか、悪いことであるかといった判断は下されない。それに対して規範経済学は結論が価値観に依存する。特定の価値観をもって政策的命題を導くことが目的となるのである。たとえば、「景気の過熱を防ぐために消費を減少させねばならないから、所得税率を上げるべきである」という命題は、景気の過熱を防がなければならないという価値観を包含している。実証経済学は事実記述的経済分析と呼ばれることもある。また、規範経済学は経済政策学と呼ばれることもある。分析にあたっては、それが実証的な目的で行われているのか、規範的な目的で行われているのかに配慮しなければならない。

**実証経済学：価値観を排除して、因果関係を明らかにする。
規範経済学：価値観に基づき、政策的命題を導く。**

ミクロ経済学 (microeconomics)	マクロ経済学 (macroeconomics)
価格 (price)	国民所得 (GDP、GNP など)(income)
需要量 (quantity demanded)	利子率 (金利)(interest rate)
供給量 (quantity supplied)	物価水準 (price level)
収入 (revenue)	為替レート (exchange rate)
費用 (cost)	消費 (consumption)
利潤 (profit)	投資 (investment)
効用 (utility)	貯蓄 (saving)

第 1-1 表 経済学で用いられる主要な変数

I-3 ミクロとマクロ

経済学はその分析手法によって、ミクロ経済学とマクロ経済学とに分けられる。ミクロ経済学というのは経済を構成する個々の消費者や生産者の行動の分析（主体的行動の分析）と、個々の市場のメカニズムの分析からなる。ミクロ経済学においては、個々の経済主体、すなわち、消費者や生産者は合理的な行動をするものと仮定され、所得や生産技術上の与えられた（所与の）制約のもとで、それぞれの経済主体がもつ目的を最大化ないし最小化するものと考えられる。このような分析は広くは制約付き最適化問題と呼んでよい。

マクロ経済学においては、一つの国や地域について、国内市場や地域内市場全体の諸数量を集計し、集計量間の関係を全体的に分析する。たとえば、日本の自動車の輸出が増加して外国の自動車生産者から反発を買うといった個別市場の問題については、ミクロ経済学の手法を適用して解決を図ることができる。しかし、日本の自動車の輸出が増加して経常収支を大幅に黒字化させる、といった国民経済レベルの問題については、マクロ経済学の手法を適用するとよい。このように、経済問題によって分析手法を使い分けねばならない。会計士試験に関しては、一般にミクロ経済学とマクロ経済学それぞれに 50 点ずつが配分されるのがふつうであり、ある問題にどの手法を適用するかということに悩む必要はない。しかし、受験生はミクロはより数学的であり、マクロ経済学はいくぶん叙述的であると感じるかもしれない。

ミクロ経済学をあえて日本語に訳すと微視的経済学となり、その分析対象から価格理論と呼ばれることもある。また、マクロ経済学を強いて日本語に訳すと巨視的経済学となり、その分析対象から国民所得理論、または略して所得理論と呼ばれることもある。第 1-1 表に、それぞれの分析手法によって頻繁に用いられる経済変数を列挙しておこう。（ ）の中に英語を記しているのは、しばしばその変数が英語の頭文字をもって示されるからであり、英語を覚える必要はない。